



大丸東京12階女子トイレ



大丸東京9階女子トイレ



大丸東京6階女子トイレ



大丸東京3階女子トイレ

設計テーマ

大丸百貨店のトイレに関しては、東京店に先がけて、神戸店で改修設計に携わった。その打ち合わせ時の神戸店担当者の言葉が印象に残っている。1995年の阪神大震災の際、大丸神戸店も一部崩壊、営業停止を余儀なくされた。「営業再開直後、女性に一番売れたものは何だと思えますか？」と聞かれ、食料品かと予想したが、それは口紅だったという。

この話を聞き、百貨店の使命のひとつは夢やゆとりを売ることなのではないかと感じ、神戸店での増築部分3フロアでは「品格と楽しさ」をテーマに設計を行った。現在でも、まちなかの好きな場所に大丸神戸店の子ども用トイレが挙げられるとのこと、13年を経てもなお、子どもたちの心に私たちの想いが届いていることが嬉しい。

東京店については、2007年末の大丸東京新店の開店に伴い、地下1階から地上12階まで12ヶ所の客用トイレの設計を行った。

私たちはこのトイレを東京駅のオアシスにしようと考えた。都会のオアシスとしての特徴が12階フロアからの眺め。大丸側の積極的な意図もあり、高級レストラン街のこの階には、当初のラフスケッチの段階からトイレが窓際の2ヶ所に配置されていた。食事にはトイレがつきもの。そのトイレで来店者に「もうひとつの贅沢なひと時」を味わってもらいたいということで、男性トイレでは小便器を、女性トイレでは手洗い場をあえて窓側に配置している。



大丸東京12階男子トイレ



大丸東京12階男子トイレ



大丸東京12階女子トイレ

滑川市立西部小学校のトイレが出来るまで

2004年、富山県滑川市の西部小学校では児童数増加に伴って増改築を行った。その際、これからの新しい教育の在り方を実践するための施設づくりが大局的に考えられた。そのうえで、増築と改修を実施し、3期にわたる丁寧な設計が繰り返された。

第1期は教室棟が増築された。教室は子どもたちが勉強する場であるとともに、学校にいる間、ほとんどの時間を過ごす大事な生活の場でもある。当然そこにはトイレが付さももの。しかしほとんどの場合、学校のトイレには汚いイメージが付きまとい、嫌われる施設となっている。

そこで西部小学校のトイレ改修工事ではワークショップを行い、子どもたちの意見を取り入れながら設計をすることで、トイレに対するイメージを変え、愛着を持ってもらえるトイレにしたいと考えた。この西部小学校改築プロジェクトは滑川市教育委員会をはじめ、学校全体の設計計画を東洋大学の長澤悟先生が指導され、全体設計者は地元の鈴木一級建築士事務所、その他学校のPT教育に対する計

画・設計には文教施設総合研究所等がそれぞれ関わりながら進められた。

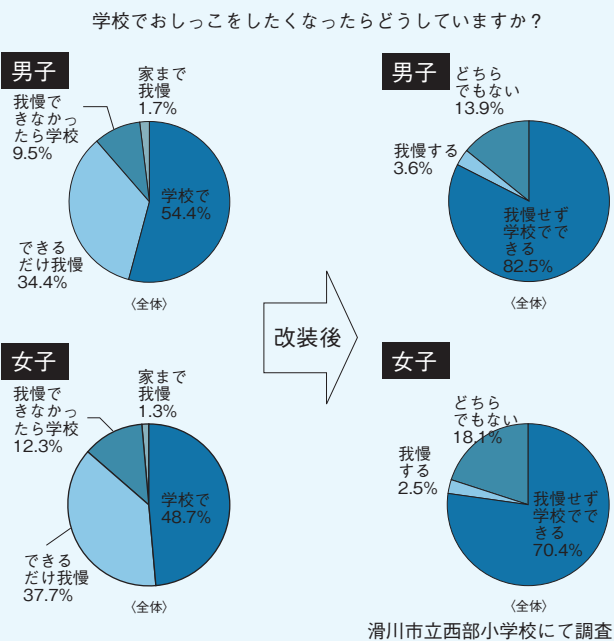
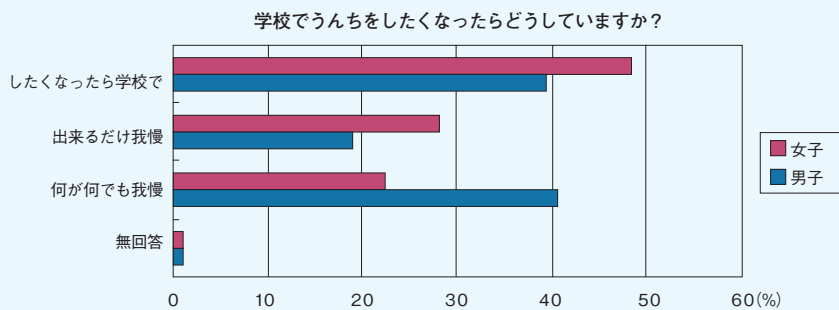
みなさんは自分が通っていた学校のトイレを覚えているだろうか？ 暗くてくさくて寒々しかったり、からかわれるからと行きたくなかった記憶はないだろうか？

アンケートによると、ある市では7割の子どもが学校ではうんちをしないと答えている。汚くてくさい、落ち着かない、恥ずかしい、からかわれるなど様々な理由がある。トイレを新しくするのであれば、ほとんどの点は解決されそうに思えるが、きれいにつくられてもその状態が保たれなければトイレはすぐ汚くなる。

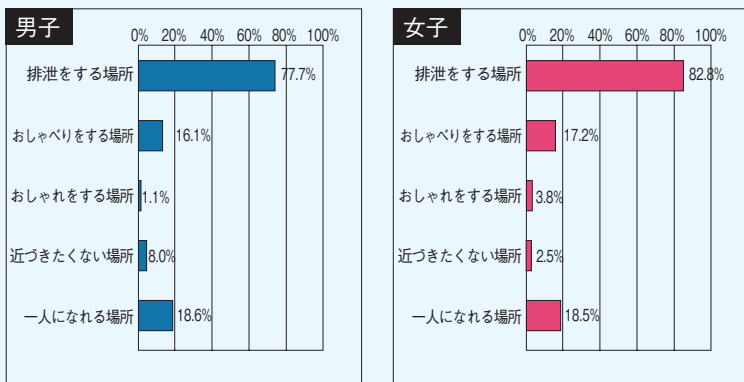
そこで、私たちはこの機会にトイレについて考えてもらおう、愛着を持って大事にしてもらおうということで、利用者である西部小学校の生徒たちにトイレづくりに関わってもらい、一緒にプランを進めることにした。

まずは、砺波市立砺波総合病院の小杉元院長先生（現八

ヶ崎医院院長／小杉肛門病センターセンター長）に排泄についての話をさせていただき、それから、子どもたちや教職員・保護者にアンケートに答えてもらった。関心の掘り起こしである。その結果、6割の子どもがうんちを我慢していることがわかった。



あなたにとってトイレはどんな場所ですか？



滑川市立西部小学校にて調査

さらに、学校のトイレはどんな場所かと聞くと、「排泄する場所」という回答は7割と圧倒的だが、「おしゃべりする場所」「一人になれる場所」という回答もあり、トイレという空間に精神的な開放を求めていると感じた。これらのアンケートの結果も取り入れて、西部小学校のトイレ設計を行うことになった。一人ひとりが落ち着いて用が足せることはもちろん、行きたくないような楽しい場所であり、子どもたちにとって学校のなかでのもうひとつの居場所となるようなトイレを目指した。



ワークショップで子どもが描いたトイレのイラスト

次に、トイレづくりに関心を持ってもらおうと、トイレワークショップを開催。4年生3クラス全員に体育館に集まってもらい、6グループに分かれて「こんなトイレが出来たらいいな」と題し、意見を出し合った。模造紙の周りに集まり、寝そべったりしながら一生懸命各自のトイレへの思いを書き出してくれた。「カラフルな色使いにして欲しい！」「こんな自動装置があったらいいな！」など、子どもたちのトイレに対する貴重な意見を聞くことが出来た。

ここまでは私たちのトイレづくりでのいつもの取り組みであるが、西部小学校ではさらに踏み込み、「トイレ探検なぜなぜレンジャー」と題し、トイレに関するアンケートから出てきた改善して欲しい要素、くさい・暗い・狭いについて、なぜそうなのかを子どもたちと一緒に考えた。

感覚的にとらえていたことについて、その原因を調べて体感し、具体的な数値や内容として示していくことで、さらに関心が深まるだけでなく、物事の理解を深める学習としての効果も得られるのではないかと期待した。



そこで、ワークショップに参加したうちの1クラスを、「におい」「広さ」「明るさ」の3グループに分け、それぞれの専門家と一緒にトイレの調査をすることにした。専門家は、清掃メンテナンス専門のにおい博士、学校全体設計者の広さ博士、照明エンジニアの明るさ博士である。

例えば、においグループでは、何がくさいのか、便器の内側に鏡を当ててのぞき、においのもととなる尿石（おしっこの中のカルシウム分が固まったもの）を発見したり、トイレの床に薬を落として色の変化を確かめたり、新たな発見に目を輝かせていた。

広さグループでは、現在のトイレの大きさを測定したう